

長崎版画と異国の面影 江戸に長崎がやってきた！

板橋区立美術館（東京） 2017.02.25～03.26

「長崎」は、オランダ船や唐船が入港し、カットガラスの食器や肉料理が並ぶ出島商館の食卓など、江戸時代は海外との貿易が盛んに行われた都市である。



「長崎版画」は、異国趣味に溢れた町の雰囲気を与える作品で、江戸時代中期から100年以上もの間に版行されて、主に土産物として親しまれてきた。

これらの版画は、市中にあった複数の版元が制作から販売まで一貫して手掛けたもので、作者の署名や版元名も無いことがしばしばであったが、西洋画法に秀でた「荒木如元」や「川原慶賀」の画人に、舶来画を鑑定・模写する「唐絵目利」（からえめきき）までの画人が関わったものと推測されている。

また、版元・大和屋に入婿した「磯野文斎」のように、合羽摺を主とした「長崎版画」に、江戸仕込みの本格的な多色摺で挑み、洗練された作品を世に送り出した「絵師」もいた。

上の写真：大和屋版《阿蘭陀船入津ノ図》（長崎歴史文化博物館）

本展は、近年にはない試みとして「長崎版画」の源流とされる「蘇州版画」や、その影響が色濃い初期から幕末までの多彩な魅力ある「約100点」を紹介している。さらに、長崎で描かれた異国の面影を感じさせる「肉筆作品約30点」を展示して、「長崎版画」を取り巻く諸相を探っているイベントである。

<主な展示作品>

